

日本スキー界育ての親

冬季スポーツの代名詞、スキー。なかでも助走台から空中に飛び出すスキージャンプは、花形競技である。

北海道札幌市にある「大倉山ジャンプ競技場」は、その跳躍の舞台として、世界中の選手、ファンが訪れるメッカである。ジャンプ場の観客席の上り口でレリーフに刻まれて横顔を見せる人物が、来場者を迎えてくれる。

レリーフの主は、日本スキー界の草分け的存在である医学者、大野精七(1885-1982)である。北海道立札幌医科大学の初代学長として医学の発展に尽くすだけでなく、日本のスキー振興に大きな足跡を残した。

大野精七(以下、精七と略)は、明治18年(1885)、生板村(現河内町)で農家の二男として生まれた。精七の学業が並々ならぬことを感じ取った親は、精七を中学校へ進学させた。

当時は日清戦争の直後。「向学心に燃えた少年は、軍人か医者^{おののせいしち}の道を探しましたが、自分が

小柄であったことから医者^{おののせいしち}の道を選び」(『図説河内の歴史』)、旧制第一高等学校(現東京大学教養学部等)を経て、東京帝国大学医科大学(現東京大学医学部)を卒業。

大正9年(1920)、北海道帝国大学(現北海道大学)医学部が発足し、翌年、精七は同大助教授となった。

同年、産婦人科医学研究のためドイツなどへの留学を命じられた。期間は2年間だったが、この留学で得た経験や見聞が、精七のその後に大きな影響を与えた。

大正13年(1924)に帰国すると、同大教授に就任。同大学医学部部長を歴任して昭和23年(1948)、定年退官。2年後、北海道立札幌医科大学初代学長に迎えられた。

このように医学界で果たした役割も大きかったが、精七にはもうひとつの顔、日本スキー界で消えることがない功績がある。

その発端はドイツにあった。『図説河内の

大野精七

Ono Seishichi

歴史』は、「先生はドイツのフライベルク大学留学中、多くのドイツ人友人にすすめられ、土曜・日曜をスキー場で過ごすようになり、すっかりスキーに魅了されてしまいました」と。スキーの本場での経験は、強烈だったのであろう。

帰国後、精七は手稲山に日本で最初のスイス式スキー小屋「パラダイス・ヒュッテ」を建設。昭和5年(1930)には、「宮様スキー大会国際競技会」の開催に奔走した。

昭和11年(1936)、精七は全日本スキー連盟副会長に就任。昭和15年(1940)2月の第5回冬季オリンピックの札幌開催に向け、実行委員会副委員長として活躍。しかし、日中戦争の激化により開催権が返上され、アジア初の冬季五輪は日の目を見なかった。だが、この努力は無駄にはならなかった。

昭和47年(1972)、ついに第11回冬季オリンピック札幌大会が開催されたのである。世界35ヶ国から選手が札幌に集まり、大倉山ジャンプ競技場からも選手が空中に飛んだ。

精七はこの雄姿をどんな思いで見たことであろうか。開催から10年後の昭和57年(1982)、彼は静かにこの世を去った。(文中敬称略)

主な参考文献

『図説河内の歴史』(平成15年、河内町発行)など。



『大野精七博士顕彰碑』=北海道札幌市中央区宮の森(撮影協力:深澤孝史、札幌市在住、美術家)

歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一

偉人から読み解く「スポーツの力」